旧約聖書は誰に与えられたか

２０１２年２月

日本人クリスチャンにとって、旧約聖書とはどんな書物でしょう。もちろん、一点一画の誤りもない「神の言葉」であることは、キリストご自身によって教えられていて明らかです。でも旧約聖書は、誰に対して与えられた書物でしょう。「私たち日本人クリスチャン」に与えられたものでしょうか。もちろん私たちはクリスチャンとして、旧約聖書が「私たちにも」与えられていることを信じています。でも、どういう意味で、私たちにも与えられているのでしょう。

旧約聖書は、直接的にはユダヤ人、イスラエル民族に与えられたものであることが分かっています。それを今、私たちは「自分たちにも与えられているもの」として、受け取っているのです。それだけではありません。私たちは旧約聖書の戒め、律法、教えを、「すべての人に与えられた」という前提で、誰かれなしに当てはめる癖がついてしまっています。それで、クリスチャンではない日本人にまでそのまま当てはめて、日本人の宗教や社会生活や習慣、あるいは文化などを裁いていることがないでしょうか。パウロは「律法の言うところは、律法のもとにある者たちに対して語られている」と言っていますが、(ローマ３：19) 私たち日本人は、律法のもとにはない民族です。

日本人クリスチャンも、クリスチャンになったからと言って、律法のもとに入ったのではありません。私たちは律法とは別に現された神の義、イエス・キリストを信じる信仰による神の義のもとに入ったのです。それなのに、私たち日本人クリスチャンは、なぜ日本人を律法によって裁くのでしょう。(ローマ３：22)

律法というのは、基本的に、イスラエル民族の宗教的純潔さを保つために、イスラエル民族に与えられたものです。イスラエルは、全人類の救い主を誕生させるために特別に選ばれた民族であり、神の特異な配慮の下にあったのです。イスラエル民族は、律法を守り、神の祝福のうちに歩み、救い主を誕生するのにふさわしい、神の民になるべきでした。ところが彼らは徹底して神に逆らって罪を犯し続け、そのたびに神の厳しい裁きと刑罰を受けてきたのです。

私たちはこの旧約聖書に記された、「反逆のイスラエル」に対する厳しい神の態度を、神の性質そのものと誤解して、もろに日本人に当てはめ、日本人と日本の文化や習慣を罪と決め付け、旧約聖書に現れた怒りの神のイメージで、猛々しく責め立ててはこなかったで

しょうか。旧約聖書の律法はイスラエル人に罪の自覚を生じさせ、救い主を待ち望ませ、悔い改めに導く働きをするものでした。ところが私たちはこの律法を、イスラエル人という枠外に持ち出して、日本人の罪を暴き、日本人の悪を糾弾するために用いてきたのです。

もとより、日本人も絶対に聖い神の御前には罪人に過ぎません。しかし、旧約聖書は日本人を罪に定めるために与えられたものではなく、ましてや日本人を糾弾するために与えられたのでもないはずです。確かに、ユダヤ人に罪を教えるために与えられた律法ですから、日本人の罪をも明らかにするものですが、律法をもって、あるいは旧約聖書に現れている神の厳しさをもって、日本人を裁くのは見当違いです。

オリンピック選手として選ばれた者たちに、「百メートルは十秒を切らなければ」と、厳しく叱咤激励し、あらゆる節制と訓練を施すのは分かりますが、わたしたちのような凡人に、同じ訓練を与え切磋琢磨を促し、同様の結果を期待してはならないはずです。私たちは、神が特別にお選びになり、様々な形で御自分を現して導き守り助けてくださった、イスラエル民族さえ守ることが出来なかった律法、イスラエル人が負いきれなかったくびきを、（使徒 15 : 10）異邦人である日本人に負わせようとして、日本人は罪人であると責め立て悦に入っていたのではないか、厳しい反省が必要です。

特に問題なのは、イスラエル人が厳しく命じられ、激しく罰せられている偶像礼拝の問題です。イスラエル人に与えられた偶像礼拝禁止の命令を、そのまま日本人に適用して日本人を糾弾するのは、右側運転をするアメリカの道路交通法を持ってきて、日本の運転をあれこれ言うのとおなじくらい、的外れもいいところです。偶像礼拝禁止の律法は、あくまでもユダヤ人に向けてのものです。旧約聖書が最初に偶像礼拝を禁止した記事を読むとそれは、明白なことです。神はユダヤ民族をエジプトの地、奴隷の家から導き登った神なのだからと、ご自分だけを礼拝するように命じ、偶像礼拝を禁止しておられるのです。（出エジプト 20：1～5）

日本人は、エジプトの奴隷の家から開放された体験を持っていません。十の奇跡も、火の柱も雲の柱も知らず、紅海が目の前で割ける驚異の出来事も見ておらず、甘くされた水を飲んだこともなく、荒野でウズラを捕まえたこともマナを拾い集めたこともないのです。日本人がたとえイスラエル人と同じ程度の偶像礼拝をしていたとしても、イスラエル人と同じ程度に刑罰を受けることはないのです。（明白な神体験をしているクリスチャンの場合は、異邦人であってもユダヤ人と同じように、きっぱりと偶像礼拝から遠ざからなければならないのは、言うまでもありません）

日本人は旧約聖書に現れた神、特に律法を通してご自分を示された神の前に、律法によ

って植えつけられた罪意識で、その罪を悔い改めて救われるのではなく、天と地を造り、あらゆる良いもので満たしてくださった神に、正しく感謝を捧げてこなかった、ふさわしく礼拝してこなかったという自覚を得て、その罪を悔い改めて救われるべきなのです。

イスラエル人に与えられた旧約聖書を通して、私たちは神の聖さ、力、栄光、人間の罪、神の救いのご計画、救い主の到来その他多くのことを知ります。そしてそれはクリスチャン信仰にも、欠く事が出来ない重要なものです。また、その教えや律法の多くは異邦人にも適用することが出来ます。しかし、旧約の律法をそのまま、異邦人である日本人に当てはめ、日本人を裁くことは出来ないのです。

パウロが異邦人、あるいは人類全般を念頭において書いた、偶像礼拝の罪に関する数少ない記述に目を止めてみましょう。また、完全な異邦人を目の前にして語ったパウロの言葉にも耳を傾けてみましょう。パウロが異邦人の罪、あるいはむしろ全人類の罪について記しているのは、ローマ人への手紙第一章です。パウロは、全人類が、男女間の正しい性的関係を捨て、同性愛という誤りに陥ったことを始めとして、様々な罪と汚れに押し流されたのは、人間が創造者である神を礼拝する代わりに、被造物に似せた偶像を礼拝したためであると語っています。神と人間との間の正しい関係が破壊されたために、人間同士のあるべき関係も歪曲されてしまったのです。偶像礼拝をする人間を、神は欲望の赴くままに任せられたと教えられています。

ですから、人間が罪と汚れの中に陥ったのは、ただ、アダムとエバの罪の結果だけではないことになります。たとえ、アダムとエバの罪のために悪魔の支配にくだったとしても、人間は本来、神に似せて造られたときに、造り主である神を知ることができる霊的能力を付与されていました。また罪のために神から追放されてしまった後も、神を知ることができるよう、特別な配慮を受けていたのに、それを生かすことができなかったのです。（ローマ 1：19－21）朽ちない創造主の栄光を称えて礼拝すべきなのに、様々な被造物を礼拝するようになってしまいました。そのために神は、人間が欲望のままに流されて生きるように、放任なさったのです。こうして人類は、二重の意味で神から離れて堕落したのです。

ここでパウロは、人間には弁解の余地がないと断定しています。なぜなら、先に述べたように、神について知りうることがら、神の性質、神の永遠の力と神性は、天地創造以来、被造物を通して明らかだからです。神がそのように明らかにされたのです。人間は神を知らなかったのではなく、神ご自身によって明らかにされたことによって、神を知っているにもかかわらず、神を神としてあがめず、感謝もせず、朽ちない神の栄光を朽ちる人間や鳥や獣や這うものに似せた偶像を拝んだのです。パウロは、はっきりと、人間は神を知っていたと断言しています。知っていながら、その思いは空しくなり、無知な心は鈍く暗く

なり、愚かになったと責めているのです。これは、アテネの町で完全な異邦人集団を相手に話しかけたときの、パウロの説教の内容に通じます。(使徒 17：27)

パウロはここで人類全般の偶像礼拝の罪を糾弾していますが、旧約聖書の律法がイスラエル民族の偶像礼拝を厳しく糾弾しているのとは、異なっています。偶像礼拝の罪が責められているのは同じですが、イスラエル人は他の異邦人と同じように、ローマ書でパウロが述べている偶像礼拝の罪を犯しただけではなく、さらにその上に神の選びの民として、明らかな神の自己啓示と教えと律法とを受け、はっきりと、明確に、そして厳格に、偶像礼拝を禁止する命令を与えられていながら、なおもかたくなに偶像礼拝の罪を犯し続けたのです。その結果、イスラエル人は神の激しい怒りと刑罰の対象となっているわけです。

もしも日本人が偶像礼拝をしているならば、その偶像礼拝はローマ書で指摘され、糾弾されている罪ではありますが、旧約聖書の律法で糾弾されている偶像礼拝の罪とは、性質が違うのです。ですから日本人の偶像礼拝の罪は、旧約聖書でイスラエル人が裁かれているようには裁かれるべきでなく、パウロがローマ書で指摘しているような意味で裁かれるべきものです。すなわち、律法のないものとして、律法なしに裁かれるべき性質のものです。(2：12)

ところで、このローマ書におけるパウロの記述は、日本人として非常に興味深いものです。まず、天地創造の神は、創造物を通して知られると語られています。しかも、神ご自身が知られるようにしてくださったということです。これはパウロのアテネのアレオパゴスでの説教に通じるものです。パウロはアテネにおいて、珍しく完全な異邦人の集団に説教する機会を得て、異邦人に通じるように説教をしています。そのとき彼は、神が隠れた神ではなく、ご自分を捜し求めるものには、見出すことが出来るようにしてくださったと述べています。(使徒 17：27)

また、神は人間の愚かな偶像礼拝を、忍耐を持って見逃してきてくださったとも語られています。(ローマ 3：25、使徒 14：16，17：30) つまり異邦人の偶像礼拝は、ユダヤ人が偶像礼拝をしたときのように、厳しく罰せられるべき性質のものではなく、他の多くの罪と同じく、神の忍耐と寛容によって、時が来るまで見逃して置かれたものだったのです。

では、神はいつのときまで、異邦人の偶像礼拝を、忍耐をもって見逃していてくださるのでしょう。パウロが語るのを聞いたアテネの人々にとっての「とき」は、パウロの話を聞いたときでしょうか。それとも、パウロの話を理解したときでしょうか。私たちは人間の小ざかしい知恵で、厳密にいつと断定すべきではありません。ただ、福音が明らかに語られ、神の姿が明瞭に提示されたと、神が判断されたときであると考えるべきです。

イスラエル人に対して神は、数々の奇跡と、不思議と、導きと、守りと、水と食料の供給をし、神こそが神であることが、少しの疑いもなく理解できるようにされた後、偶像礼拝禁止の律法をお与えになりました。日本人の偶像礼拝を、イスラエル人の偶像礼拝と同じように責めるのが神のみ心であるなら、イスラエル人に対するのと同じように、日本人にも御自分を明らかに現してくださったはずです。なぜなら神は公平なお方だからです。

ところが日本人に御自分を現してくださっている神は、特別な啓示や自己顕現によってではなく、被造物を通しての、いわば間接的な啓示や顕現、普通自然啓示と呼ばれる方法を採っておられるのです。パウロは、それでも異邦人は神を知っていたし、神が知るようにされたのだと言っていますので、確かに日本人も、神を知っていたのです。特に日本人は、パウロが言うように、被造物、自然の中に神を見てきました。日本人の神意識は、自然の中に啓示された神を感じて抱いた神意識ですから、そこにはたくさんの不明瞭な側面があり、多くの間違いがあります。それでも、日本人は神を知っていたのです。

確かに、多くの民族の偶像礼拝に比べると、日本人は一般的に、かなり高度な神意識を持っています。神に似せて造られた人間として、その霊的本性をあまり失わずに、神を意識することが出来ているようなのです。日本人は、神は自然の中に、あるいは自然物の中に宿ると感じてきたのは間違いありません。ところが俗説に反して、ごくまれな例外を除いては、自然物そのものを神とすることはありませんでした。ましてや、すべての自然物を神格化して、完全な多神論に陥ることなどはなかったのです。

かなり微妙なところですが、日本人は自然に神が宿っておられること、潜んでおられること、自然は神の性質を持っていることを認めていながら、厳密には、自然を神とするところまでは行っていないのです。せいぜい、自然を神の象徴とするくらい、あるいは神の性質の現れとするくらいです。そしてその象徴あるいは現われに頭を垂れ、拍手を打つのです。これを表面的に見ると、自然崇拝であり、自然を神としているかのように見えるのです。たとえば、ご来光に拍手（かしわで）を打ち、頭を垂れ、ありがたがっている人たちに尋ねてみても分かることですが、誰も、太陽を女神として礼拝しているのではないのです。ただ、神々しい方の象徴、現われとして太陽を見、手を合わせているのです。

自然物を神格化した多神教などは、ほとんどの日本人にはばかばかしいものとなっているのです。日本人は、自分の心の底に有る神意識を充分に説明できないものであるために、つい擬人化と同じように「疑神化」して、多神論的に八百万の神々などと言って、あたかも多くの神々を信じているように考えられていますが、本当のところ、八百万の神々をまじめに信じている日本人など、いたとしてもごくわずかなのです。

日本人は自分でも良く分からないまま、説明もできないまま、被造物を通して知られる、栄光の神、朽ちない神、大きな力を持ち、いのちに満ちた神を感じているのです。その神はまた、キリストが語ったように、雨を降らせ、太陽を昇らせられる神であり、パウロが語ったように、人をご自分の中に生かしていてくださる恵み深い神なのです。それは聖書が教えている唯一の神、天地創造の神、絶対の神、いのちの源の神、恵み深く、豊かな優しさを持つ神に、非常に良く似た神なのです。

日本人は多神教の神々を信じていると言われ、汎神論の神々を信じていると言われ、アニミズムの世界のいろいろな霊の存在を信じていると言われています。ところが実のところ、かなり唯一の神に近い感覚を持っています。確かに日本人の神観は、アニミズム的であることには間違いありません。聖書の世界も、唯一の神、創造主の存在を前提としたアニミズムなのです。日本人の感覚は、聖書の啓示によって教えられているわけではありませんから、当然不鮮明です。しかしあらゆる霊的な存在、神と呼ばれ、精霊と呼ばれ、怨霊と呼ばれ、死霊と呼ばれ、幽霊と呼ばれ、魑魅魍魎（ちみもうりょう）と呼ばれ、お化けと呼ばれ、なにやら分からない雑多な霊的存在の上に、力を持っておられる方、それらすべてを超えておられる方の存在を感じているのです。

多くの有名な大社に祀られている神々は、それぞれ別の名がある異なった神々であるかのように言われていても、それは見えない大きな唯一の方の仮の姿、権化に過ぎないと感じているのです。だから一般の日本人は、どこの神社に参拝しても、そこに祀られている神がどのような神で、どのような性質を持ち、どのような力を持っておられるかなどと言うことに、ほとんど興味を示しません。安産の神、縁結びの神、学問の神、交通安全の神などと言われると、感覚としては、あのかしこく尊いお方より一段低い、「諸霊」の中の一つのように感じてしまうのです。日本人が、ありがたいと感激し、かたじけないと涙する相手は、そのような神々ではなく、一番高いところにおられる大きなお方なのです。

日本人にとって、神とは本来「うえ」と言う意味に過ぎません。人間よりもどこか高い能力、強い能力、優れた能力を持つものはみな神でありえるわけです。それらの神々は、容易に様々な霊と一緒にされ、案外偶像化されやすいところもあるために、時々道端にも転がっています。神の定義を「人間より上の存在」とすると、日本人は、なるほど、多神論です。でも、それと同じ定義を聖書の世界に適用すると、聖書の教える世界もまた、人間より上のみ使いや悪霊たちがたくさん存在する、多神教の世界なのです。聖書自体が、神々と言う言葉を幾度か用いているほどです。それでも、日本人が本当に気高く貴く大きく強く、人間に優しく、恵みにあふれておられる方と感じ、神とお呼びしてよいのかさえ分からない方として、心の奥で感じているのは「おひとりの神」なのです。

日本人の宗教意識の中にある、もう一つの素晴らしい点は、神を偶像化しないことです。神仏習合（仏教と神道が混じり合ったこと）によって神道的感覚にも偶像が混じりこみましたが、日本人はやはり、神道的感覚を仏教的感覚に先行させているのです。宗教的感覚の最も深いところにあるのは、仏教ではなく神道的な感覚です。現在、ほとんどの日本人にとって、たとえ自分は仏教徒だという日本人にとっても、心のもっとも深いところで感じているのは仏ではなく、よくはわからないけれども、神道的感覚の神なのです。その神は、あまりにも気高く貴く、形で表現表すことなどできないと感じているために、日本人は決してこの方を偶像化しないだけではなく、この方を崇める行為を、宗教の範疇にさえ置きたがらないのです。むしろ日本特有の文化であり、日本人の精神であるとさえ言うのです。またこの方を言葉で表現することも不可能であり、畏れ多いと感じているために、西欧キリスト教が作り上げたような饒舌な神学を作り上げることをせず、そっと、大切に崇めて来たのです。

平清盛と同い年で、若いころは共にエリートとして交流もあっただろうと言われている西行法師は、伊勢神宮にお参りをした折に、かの有名な「なにごとのおわしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるる」という歌を詠みました。仏僧でありながら、実に日本人的な、というか、神道的な感覚をもって、どなたかは知らない方の豊かな恵みの前に感謝の涙を流す心を表現しています。ありがたいと涙を流すのは、仏に向かってではなく、神宮が祀る天照大神でもなく、どなたか分からない方、日本人が昔から感じてきた気高い方です。この気高い方を、人間や鳥や獣や這うものの姿に似せることは出来なかったのです。

自覚さえしていない人がほとんどであるとは思いますが、大概の日本人はこのような感覚を共有しているのです。大切なことは、旧約聖書の律法を振り回して、このような日本人を偶像礼拝者と決め付けて責め立て、せっかくの会話の糸口を失ってしまわないことです。かえって、日本人の心の奥底に潜んでいる、極めて日本人らしい宗教感覚を大切にして、その中の気高い存在者に対する眠れる思いを目覚めさせて、私たちが信じている神に近づけるようにしてあげることが肝要です。

多くの日本人は、西行法師と同じように、誰に感謝をしたら良いのか分からないままに生きています。おぼろげに、大きく気高く慈しみに富む方を感じ、生かされている、食べ物も着物も住むところも与えられていると感じています。それなのに、この貴い方に正しく感謝を捧げていないこと、はっきりとした理解をもって礼拝をしていないことに、なにかうしろめたさを感じ、僅かながらでも良心の呵責を感じています。ですから、それこそが神に対して犯すことのできる、人間のもっとも大きな罪であると知ってもらえばいいの

です。まさに不義理の罪。親不孝ならぬ神不孝の罪です。これならば、旧約聖書の律法を振り回して、「罪、罪」と叫んで回らなくても、日本人に正しい罪意識を持ってもらえるはずです。

私たちは日本人です。律法なしに裁かれるべき民族です。ですから旧約聖書を持ち出して、旧約の律法で日本人を裁くことはやめましょう。くり返しますが、「律法の言うことはみな、律法の下にある人々に対して言われている」のです。(ローマ 3：19)「律法なしに罪を犯したものはすべて、律法なしに滅び」るのです。(2：12)「律法をもたなくても自分自身が自分に対する律法なのです」(2：14) 彼らの人間性の中にある、神の聖さの写しとも言える人間性と、その人間性が文化という苗床で萌え出た良心が、大きな役割を果たすのです。(2：15) それは、神がご自分に似せて人間をお造りになったときに与えてくださった、人間本来の性質であり霊的な性質なのです。日本人が救われるのは、律法を守ることによってではありません。律法とは別に与えられる神の義によってです。

日本人は、たとえ自覚しないままではあったとしても、創造のときに与えられた神に似た姿を大切に持ち続け、鋭い良心を保ってきました。自然を通して知ることができる神の姿を尊んで、偶像に移し代えることを拒んできました。そのために、偶像礼拝をしている多くの民族ほどには、罪と汚れに押し流されずに来たところがあります。

日本人の心に本能的に潜んでいる神意識を大切にしてあげましょう。その神意識がどれほど素晴らしいかを、多くの日本人は自覚していません。それを気付かせてあげるのです。その神意識がどれほど聖書の神に近いものであるかを、肯定的に教えてあげるのです。日本人は、普通考えられているよりは、ずっと救いの近くにいるのですから。